

第十四週

はなしあひ

夏休みの前々日等に、夏休みの近いことを話しする。妙なもので、毎日幼稚園に来ることを、この上なく楽しんでゐながら、来られなくなるお休みの、その夏休みを大そう喜ぶ。つまり日々登園してゐたのが、来なくなるこいふ變

觀 察

第十三週

七夕まつり

年中行事の中でも一番ロマンティックで、床しいこのお祭りは幼稚園でも是非し度いものゝ一つである。手技に、談話に、誘導されてこの週はオール七夕であるから今更言ふ迄もないが、それにほんのつけたりとして、色彩感覺を言ふと少々堅くなるしくなるけれど、そんなものを養ふに洵によい機會だと思ふ。

化が一寸もの珍らしくもあり、又、この夏こいふ言葉の齋らしてくる海、山の生活が楽しく豫想されるのもあらう。

豫定を云つても、子供自身にそれが云へる筈もないので、こちらから、何處へは、決してきかない。子供の方からいろ／＼云ふのは、さう／＼受けてきいておく。いろいろの諸注意は、生活訓練の方で。

朝顔の成長

殊更に言ふ迄もなく、この朝顔はみんなでまいたものである。その成長にはいつも氣をつけてゐる筈である。けれどこの位にまで伸びる頃は、兎もするに忘れ勝になる。そこで氣をつけて子供達と一緒に世話をする機會を多くし度いものである。